

[原著論文]

地域愛着の醸成要因と地元就職希望に与える影響
－内モンゴルにある大学の中国人の大学生と大学院生を対象とした分析－

西尾 恵里子*

**Factors Fostering Place Attachment and Their Influence on Desire
for Local Employment
-An Analysis of Chinese Undergraduate and Graduate Students at
a University in Inner Mongolia-**

Eriko NISHIO*

Abstract

To explore Chinese undergraduate and graduate students' local employment preferences, a questionnaire survey was administered to participants at a university in Inner Mongolia in September 2023. Survey content included respondent attributes, place attachment, communication with neighbors, activities aimed at regional learning, local experiences with nature, and family and personal local employment preferences. Exploratory factor analysis and structural equation modeling were applied to the survey responses to examine the relationship between place attachment and respondents' local employment preferences.

Results showed that engaging in regional learning activities and local nature experiences enhanced "place attachment". This, in turn, increased students' desires to work locally. However, students' families' opinions also influenced their desire to work locally. It was also suggested that "place attachment" enhanced "place contribution". The research results indicate that to foster "place attachment," it is important for students to learn about local traditions and culture, participate in festivals, and experience nature from elementary school onward. The findings suggested that focusing on place attachment in this way will deepen local community bonds, potentially leading to increased local employment.

KEY WORDS : Place attachment, Structural equation modeling, Regional learning activities

*九州共立大学経済学部

*Faculty of Economics, Kyushu Kyoritsu University

1. 緒言

2014年、当時の安倍内閣は東京一極集中を是正し、地方の人口減少に歯止めをかけるために、地方創生という概念を打ち出した。地方創生は、地域の活性化や持続可能な発展を目指すために、経済、社会、文化、人材などの要素を総合的に考慮し、地域資源の活用や新たな産業の育成などを通じて地域の魅力を高める取り組みである。この取り組みは日本国内だけではなく、中国において地方の振興や人材の流動性に関する課題が顕著になっていることから、中国でも地方創生の考え方や手法が注目されている^{1), 2)}。2019年に日本と中国は「地方創生」で連携を目指す覚書を交わし、相互に学び合うことで地域振興に取り組んでいる³⁾。

今回、中国の地域振興に寄与すると考えられる地元就職志向を探ることを目的とした。中国の大学生の就職志向として「安定志向」⁴⁾、地元就職については「親の影響」等⁵⁾が先行研究で示されている。日本の若年層の地域愛着が将来の定住意識^{6), 7)}やUターンなどに及ぼす影響^{8), 9)}についての先行研究はあるが、中国の若年層の地域愛着と地元志向の関係性から研究されて

いる研究は見当たらない。そこで、内モンゴルにある大学の日本語を専攻する中国人の大学生および大学院生を対象として、地元の地域愛着と自分自身の就職希望の関係を考察するために、アンケート調査を実施した。調査項目は属性、地域愛着、近所の人とのコミュニケーション、地域を学ぶ活動、自然体験、家族の地元の就職希望、自分自身の地元の就職希望および地域貢献についてである。この調査項目について因子分析、共分散構造分析を行った。

2. 内モンゴル自治区にあるA大学の概要

中国は、22省・5自治区（内蒙古、広西チワン、チベット、寧夏回族、重慶）・4直轄市（北京、天津、上海、重慶）・2特別行政区に分けられ、合計33の一級行政区が存在する。内モンゴル自治区は中国の華北地区に位置し、農業・畜産を主要な産業としている。A大学は首府のフフホト市にあり、1957年に創立の総合大学で、国家「211プロジェクト」指定の重点大学である。2021年の時点で、在学学生は大学院生を含めて約21,241人である¹⁰⁾。

表1 質問項目と回答形式

設問	項目	回答形式
	性別	0=男性, 1=女性
Q1	専攻 (学部・学科)	1=外国語学院 日本語学部 (学部生), 2=外国語学院 日本語翻訳専攻 or 日本語語言文学専攻 (大学院生)
	年齢	自由回答
Q2	兄弟の有無	0=いない, 1=いる
Q3	地元の居住年数	自由回答
Q4	地元のまちは住みやすいと思う。	
Q5	地元にお気に入りの場所がある。	
Q6	地元のまちを歩くのは気持ちよい。	
Q7	地元のまちの雰囲気や土地柄が気に入っている。	1=全く当てはまらない, 2=当てはまらない, 3=どちらでもない, 4=やや当てはまる, 5=とても当てはまる
Q8	地元のまちに住み続けたい。	
Q9	地元のまちに自分の居場所がある気がする。	
Q10	地元のまちに愛着を感じている。	
Q23	地元の役に立ちたいと思う。	
Q11	地元において、近所であいさつを交わす人の割合	0=0人, 1=2, 3人, 2=4~9人, 3=10人以上
Q12	地元において、近所で頻繁に話をする人の割合	
Q13	小学校時に自然の中で遊んだ頻度	1週間のうち 0=0日, 0=1~2日, 2=3~5日, 3=ほぼ毎日
Q14	中学校時に自然の中で遊んだ頻度	
Q15	小学校時に授業で、地域の伝統や文化学んだ。	0=全く学ばなかった, 1=学んだかもしれないが、印象に残っていない, 2=学んだ, 3=積極的に楽しく学び、時間外でも学びを深めた
Q16	中学校時に授業で、地域の伝統や文化学んだ。	
Q17	地元で学校の活動以外で地域の祭りに参加した。	0=全く参加しない, 1=たまに参加した, 2=時々参加した, 3=あるものほとんどに参加した
Q19	地元で学校の活動以外で地域の行事に参加した。	
Q18	祭りや神事などに役割 (お囃子・太鼓・踊り手など) を持って参加した。	0=ない, 1=ある
Q20	行事に役割 (リーダー、副リーダー、企画など) を持って参加した。	
Q21	家族が地元での就職を希望する。	0=希望しない, 1=どちらかという并希望しない, 2=どちらかという并希望する, 3=希望する
Q22	自分自身が地元での就職を希望する。	

3. 方法

1) 調査対象者および調査項目

内モンゴル自治区にあるA大学の外国語学院 日本語学部の中国人の学部生、および外国語学院 日本語翻訳専攻 または 日本語語言文学専攻の中国人の大学院生に、アンケート調査用紙を配付してA大学で調査を行った。時期は2023年9月19日、20日に講義の一部を利用して行なった。事前に調査目的や個人情報管理などに関する説明を口頭で行い、調査協力に対して同意が得られた者を対象に行なった。86枚のアンケート用紙を回収してA大学から一人ずつの回答をワードもしくはPDF形式のファイルにしてメールで送ってもらったが、13枚はファイルが開けなかったため73枚でデータ解析を行った。その中で全回答数は60枚であった。

質問項目および回答形式を表1、回収した73枚での回答者の属性を表2に示す。質問項目の「地域愛着」は鈴木・藤井¹¹⁾、「コミュニケーション」は桜井ら¹²⁾、「自然体験」、「祭体験」、「行事参加」は黒田ら¹³⁾、「家族の地元での就職希望」、「自分自身の地元での就職希望」は安藤⁹⁾を参考に設計した。なお、本調査の実施にあたっては、九州共立大学倫理審査委員会の承認を得た(承認番号：2023-14)。

表2 回答者の属性

項目	回答形式
性別 (n=72)	男性 = 19.4%, 女性 = 80.6%
専攻 (学部・学科) (n=73)	外国語学院 日本語学部 (学部生) = 69.9%, 外国語学院 日本語翻訳専攻 or 日本語語言文学専攻 (大学院生) = 30.1%
兄弟の有無 (n=72)	いない = 48.6%, いる = 51.4%
年齢 (n=73)	19歳 = 1.4%, 20歳 = 11.0%, 21歳 = 34.2%, 22歳 = 21.9%, 23歳 = 9.6%, 24歳 = 6.8%, 25歳 = 6.8%, 26歳 = 5.5%, 27歳 = 1.4%, 29歳 = 1.4%
地元の居住年数 (n=73)	18.9±5.4年 (平均)

2) 分析

地域愛着およびそれを醸成する要因であると仮説を立てた項目を探索的因子分析(最尤法, プロマックス回転)にかけ、どのような因子構成になっているのかを確認した。各因子の内的整合性を確認するために信頼性分析を行い、クロンバックの α 係数を求めた。73サンプルの探索的因子分析にかけた各項目および「家族の地元での就職希望」、「自分自身の地元での就職希望」、「地域貢献」の3項目について肯定的意見の割合、平均値を求めた。次に地域愛着を醸成する要因および地域愛着と地元での就職希望の関係を明らかにするために、共分散構造分析を行った。探索的因子分

析および共分散構造分析については、73サンプルおよび60サンプルの両方で行った。なお、73サンプルについて探索的因子分析の際は欠損値を平均値で置換し、共分散構造分析の際は平均値と切片を推定して分析を行った。統計解析にはIBM SPSS Statistics Ver.23およびIBM SPSS Amos Ver.29(日本IBM株式会社)を用いて、5%水準未満を有意とした。

4. 結果

1) 因子分析

73サンプルの地域愛着およびそれを醸成する要因になり得ると仮説を立てた項目について、探索的因子分析(最尤法, プロマックス回転)を行った。その際に「Q9地元のまちに自分の居場所がある気がする。」を除外して分析した所、4つの因子を抽出した。因子を解釈するための因子負荷量は|0.40|程度を取ることが多い¹⁴⁾ことから、因子負荷量の0.4以上の値に網掛けをした(表3-1)。なお、16項目の相関行列の妥当性を確認するために、Kaiser-Meyer-Olkin(以下、KMO)の標本妥当性の検討およびBartlettの球面性検定を行った。KMOは0.7以上が望ましいとされている¹⁵⁾が、今回KMOは0.780であり、また球面性検定有意確率は $p < 0.001$ であることから、因子分析の適用は妥当であると判断した。

第1因子は先行研究¹¹⁾を参考にして『地域愛着』、第2因子は授業での地域の伝統や文化の学び、祭り・行事参加から構成されているので『地域を学ぶ活動』、第3因子は自然の中で過ごすことから『自然体験』、第4因子は近所での挨拶や頻りに話をする人の割合であることから『コミュニケーション』とした。各因子のクロンバックの α 係数は、第1因子0.92、第2因子0.75、第3因子0.73、第4因子0.72であり、0.7以上であれば信頼の高い尺度とみなされる¹⁶⁾ことから、信頼の高い因子であることを確認した。また、第1因子と第2因子、第1因子と第3因子、第2因子と第3因子、第2因子と第4因子については相関関係にあることを確認した。

60サンプルについても73サンプルと同様の方法で探索的因子分析(最尤法, プロマックス回転)にかけた結果を表3-2に示す。因子数は73サンプルと同様に「Q9地元のまちに自分の居場所がある気がする。」を除外して分析した所、4つの因子を抽出した。KMOは0.740、球面性検定有意確率は $p < 0.001$ となり、因子分析の適用は妥当であると判断した。「Q19地元の行事参加」については73サンプルで第2因子の因子構成で

表3-1 探索的因子分析の結果 (n = 73)

設問	項目	因子			
		1	2	3	4
		地域愛着	地域を学ぶ活動	自然体験	コミュニケーション
Q4	地元のまちは住みやすいと思う。	0.913	0.006	0.040	-0.099
Q7	地元のまちな雰囲気や土地柄が気に入っている。	0.910	-0.075	-0.126	0.028
Q8	地元のまちに住み続けたい。	0.851	-0.112	-0.100	0.140
Q10	地元のお気に愛着を感じている。	0.812	-0.017	-0.133	0.019
Q5	地元にお気に入りの場所がある。	0.768	-0.029	0.187	-0.089
Q6	地元のまちを歩くのは気持ちよい。	0.633	0.108	0.320	-0.137
Q16	中学校時に授業で、地域の伝統や文化を学んだ。	-0.043	0.697	0.270	-0.007
Q17	地元で学校の活動以外で地域の祭りに参加	0.037	0.679	-0.001	0.147
Q18	地元で祭りや神事に役割を持って参加	-0.122	0.611	-0.042	-0.134
Q19	地元で学校の活動以外で地域の行事に参加	-0.152	0.591	-0.229	-0.128
Q15	小学校時に授業で、地域の伝統や文化を学んだ。	0.274	0.449	-0.035	0.269
Q20	地元で行事に役割を持って参加	0.061	0.430	-0.051	0.065
Q14	中学校時、自然の中で遊んだ。	-0.119	-0.165	1.061	0.130
Q13	小学校時、自然の中で遊んだ。	0.063	0.030	0.581	-0.099
Q11	近所であいさつを交わす人の割合	-0.033	-0.031	-0.020	0.860
Q12	近所で頻繁に話をする人の割合	-0.019	-0.060	0.064	0.675

因子相関行列

因子	1	2	3	4
1	1.000	0.395	0.507	0.141
2	0.395	1.000	0.359	0.460
3	0.507	0.359	1.000	0.279
4	0.141	0.460	0.279	1.000

最尤法で因子抽出し、プロマックス回転を行った。欠損は平均値で置換した。
因子負荷量0.40以上の値に網掛けをした。

あったが、60サンプルにおいては因子負荷量が0.384であったので除いた。第1, 3, 4の因子構成、「Q19地元の行事参加」を除いた第2の因子構成および因子間の相関関係も73サンプルと同様であった。因子のクロンバックの α 係数は、第1因子『地域愛着』0.92, 第2因子『地域を学ぶ活動』0.76, 第3因子『自然体験』0.74, 第4因子『コミュニケーション』0.75であった。60サンプルについては、性別および兄弟の有無と上記の4つの因子との関連性をマン・ホイットニーのU検定(平均値との比較)で分析した所、有意ではなかった。

2) 各項目のスコア

73サンプルの探索的因子分析にかけた各項目および「Q21家族の地元での就職希望」、「Q22自分自身の地元での就職希望」、「Q23地域貢献」の3項目についてのスコアを表4に示す。『地域愛着』を構成する肯定的回答について「Q8地元のまちに住み続けたい。」は56.9%であったが、他の5項目は80%前後であった。

『地域を学ぶ活動』については、「Q16中学校時に授業で、地域の伝統や文化を学んだ。」の肯定的回答は43.5%「Q15小学校」では60.3%であり、小学校に比べて中学校は低くなっていた。「Q17祭り参加」の肯定的回答は39.1%、「Q19行事参加」は28.8%であった。『自然体験』については、「Q14中学校時に自然の中で遊んだ頻度」の肯定的回答は13.9%、「Q13小学校」では57.0%であり小学校と比べて中学校はかなり低くなっていた。

『コミュニケーション』については、「Q11地元において近所であいさつ交わす人の割合」の肯定的回答の割合は82.2%であった。桜井ら¹²⁾は横浜市の牛久保西地区の町内会の20代～70代以上を対象者(n = 398)

表3-2 探索的因子分析の結果 (n = 60)

設問	項目	因子			
		1	2	3	4
		地域愛着	地域を学ぶ活動	自然体験	コミュニケーション
Q4	地元のまちは住みやすいと思う。	0.983	-0.014	-0.005	-0.134
Q7	地元のまちな雰囲気や土地柄が気に入っている。	0.953	-0.014	-0.170	0.069
Q10	地元のまちに愛着を感じている。	0.790	-0.025	-0.075	0.005
Q8	地元のまちに住み続けたい。	0.725	0.058	0.001	0.045
Q5	地元にお気に入りの場所がある。	0.703	-0.034	0.266	-0.042
Q6	地元のまちを歩くのは気持ちよい。	0.634	-0.002	0.387	0.000
Q16	中学校時に授業で、地域の伝統や文化を学んだ。	-0.156	0.959	0.239	-0.142
Q15	小学校時に授業で、地域の伝統や文化を学んだ。	0.301	0.619	-0.123	0.089
Q17	地元で学校の活動以外で地域の祭りに参加	0.087	0.580	-0.006	0.191
Q18	地元で祭りや神事に役割を持って参加	-0.143	0.524	-0.074	0.056
Q20	地元で行事に役割を持って参加	0.142	0.429	-0.156	0.031
Q13	中学校時、自然の中で遊んだ。	-0.026	0.018	0.834	0.066
Q14	小学校時、自然の中で遊んだ。	0.047	-0.050	0.661	-0.022
Q19	地元で学校の活動以外で地元の行事に参加	0.033	0.384	-0.394	-0.095
Q11	近所であいさつを交わす人の割合	-0.002	-0.058	0.082	1.012
Q12	近所で頻繁に話をする人の割合	-0.051	0.241	-0.022	0.551

因子相関行列

因子	1	2	3	4
1	1.000	0.423	0.499	0.127
2	0.423	1.000	0.308	0.296
3	0.499	0.308	1.000	0.138
4	0.127	0.296	0.138	1.000

最尤法で因子抽出し、プロマックス回転を行った。
因子負荷量0.40以上の値に網掛けをした。

として同様の調査をした所71.1%、北九州市にあるB大学において日本人の学生(n = 305)では48.9%(未発表, 西尾・入江)であった。「Q12近所で頻繁に話をする人の割合」の肯定的回答はA大学の中国人大学生56.2%、桜井ら¹²⁾の調査(n = 398)においては23.6%、B大学の日本人の学生(n = 305)では30.8%(未発表, 西尾・入江)であり、中国人の大学生はいずれの調査よりも割合が高かった。「Q21家族の地元での就職希望」の肯定的回答は47.9%、「Q22自分自身の地元での就職希望」は36.1%、「Q23地元の役に立ちたいと思う。」は65.7%であった。

3) 地域愛着と地元就職の関係性の分析

地域愛着と地域愛着を醸成する要因、さらには地域愛着と自分自身の地元の就職希望の関係を明らかにするために、73サンプルおよび60サンプルで共分散構造分析を行った。藪谷・阿久井¹⁷⁾は、自然接触および人接触が地域愛着(選好)を醸成することを示した。海野ら⁸⁾は若年層のUターン意思がある群は地域愛着が高く、また住民参加型の祭りなどがUターン意思に影響することを示した。引地ら¹⁸⁾も「祭り」などのイベントが地域愛着を高めると指摘している。鈴木・藤井¹⁹⁾は地域風土接触が地域愛着を醸成し、地域愛着が高い人ほど地域への活動に熱心である傾向を示した。また、地域愛着が将来の定住意識^{6), 7)}やUターンに影響を及ぼす⁹⁾ことが示されている。これらの先行研究から仮説を立ててモデルを考えた。

既述の探索的因子分析、マン・ホイットニーのU検定の結果、および仮説モデルにおける各変数の関連性を確認しながら有意ではない関連は削除し、分析し直

表4 各項目のスコア

大分類	設問	項目	n	肯定的回答の割合 (%) *	平均値	標準偏差	クロンバックの α 係数
地域愛着	Q4	地元のまちは住みやすいと思う。	72	80.5	4.31	0.97	0.92
	Q7	地元のまちな雰囲気や土地柄が気に入っている。	71	78.8	4.21	1.11	
	Q8	地元のまちに住み続けたい。	72	56.9	3.54	1.44	
	Q10	地元のまちに愛着を感じている。	72	87.5	4.36	0.94	
	Q5	地元にお気に入りの場所がある。	72	80.6	4.31	1.08	
	Q6	地元のまちを歩くのは気持ちよい。	72	82.0	4.35	1.08	
地域を学ぶ活動	Q16	中学校時に授業で、地域の伝統や文化を学んだ。	69	43.5	1.33	1.12	0.75
	Q17	地元で学校の活動以外で地域の祭りに参加した。	69	39.1	1.30	1.10	
	Q18	祭りや神事などに役割（お囃子・太鼓・踊り手など）を持って参加した。	73	37.0	0.37	0.49	
	Q19	地元で学校の活動以外で地域の行事に参加した。	73	28.8	1.07	0.82	
	Q15	小学校時に授業で、地域の伝統や文化を学んだ。	73	60.3	1.70	1.06	
自然体験	Q20	行事に役割（リーダー、副リーダー、企画など）を持って参加した。	73	23.3	0.23	0.43	0.73
	Q14	中学校時に自然の中で遊んだ頻度	72	13.9	0.92	0.87	
コミュニケーション	Q13	小学校時に自然の中で遊んだ頻度	72	57.0	1.79	0.92	0.72
	Q11	地元において、近所であいさつを交わす人の割合	73	82.2	2.22	0.87	
家族の地元での就職希望	Q12	地元において、近所で頻繁に話をする人の割合	73	56.2	1.73	0.99	-
	Q21	家族が地元での就職を希望する。	71	47.9	1.41	0.75	
自分自身の地元での就職希望	Q22	自分自身が地元での就職を希望する。	72	36.1	1.21	0.73	-
地域貢献	Q23	地元の役に立ちたいと思う。	73	65.7	3.82	1.15	-

*大分類の「地域愛着」については、「4」「5」、Q18「祭り参加の役割」およびQ20「行事参加の役割」は「1」、それ以外は「2」「3」と回答した割合

すことを繰り返して5%未満有意を満たすように推定を行った。一方、モデル適合度を表す指標はGFI \geq 0.9 ~ 0.95, AGFI \geq 0.9目標, GFI \geq AGFI, CFI \geq 0.9 ~ 0.95, RMSEA \leq 0.08で妥当であると判断される²⁰⁾。モデル適合度の指標の値に近づけるために検討した結果、『地域愛着』については構成要素である「Q6地元のまちを歩くのは気持ちよい。」および「Q10地元のまちに愛着を感じている。」、『地域を学ぶ活動』については構成要素である「Q18地元で祭りや神事などに役割を持って参加」および「Q19地元で学校の活動以外で地元の行事に参加」を除外した。

73サンプルの結果を図1-1に示す。四角形で示されているものが観測変数、楕円で示されているものが潜在変数である。パスに付された値は標準化されたパス係数で、因果関係の影響の強さを表す。CFI=0.930, RMSEA=0.075であり適合度の基準を満たしていた。以下、本項においてカッコ内はパス係数を示す。『自然体験』(0.30)と『地域を学ぶ活動』(0.31)から『地域愛着』に向けた因果パスが確認できた。『地域愛着』の決定係数はR²=0.27であり、『自然体験』と『地域を学ぶ活動』によって『地域愛着』の27%が説明されると解釈できた。

『地域愛着』について観測変数へのパス係数の大きい順に「Q4地元のまちは住みやすいと思う。」、「Q5地元にお気に入りの場所がある。」、「Q7地元のまちな雰囲気や土地柄が気に入っている。」、「Q8地元のまちに住み続けたい。」であった。『自然体験』についての観測変数へのパス係数の大きい順に「Q14中学校時に

自然の中で遊んだ頻度」[Q13小学校時に自然の中で遊んだ頻度]、『地域を学ぶ活動』については「Q16中学校時に授業で、地域の伝統や文化を学んだ。」、「Q15小学校時に授業で、地域の伝統や文化を学んだ。」、「Q17地元で学校の活動以外で地域の祭りに参加した。」、「Q20地元で行事に役割を持って参加した。」であった。『地域愛着』(0.40)から「Q23地域貢献」に向けた因果パスも確認できた。『地域愛着』(0.35)と「Q21家族の地元での就職希望」(0.45)から「Q22自分自身での地元での就職希望」に向けた因果パスが確認できた。「Q22自分自身での地元での就職希望」の決定係数R²=0.32であり、『地域愛着』と「Q21家族の地元での就職希望」によって自分自身の地元での就職希望の32%が説明できると解釈でき、家族の地元での就職希望の方が地域愛着よりも影響を及ぼしていることが分かった。

60サンプルの結果を図1-2に示す。適合度はGFI=0.819, AGFI=0.735, CFI=0.896, RMSEA=0.099であり、基準を幾分満たしていなかった。60サンプルが適合度を満たしていないことについてはサンプル数が少なかったことも一因であることが考えられる。しかし仮説に基づき全変数に有意なパスが引けていることから、構成要素間の関係を大筋捉えていると判断した。『自然体験』(0.32)と『地域を学ぶ活動』(0.35)から「地域愛着」に向けた因果パスが確認できた。『地域愛着』の決定係数はR²=0.33であり、自然体験と地域を学ぶ活動によって『地域愛着』の33%が説明されると解釈できた。

『地域愛着』について観測変数へのパス係数の大きい順に「Q4地元のまちは住みやすいと思う.」, 「Q7地元のまちの雰囲気や土地柄が気に入っている.」, 「Q5地元にお気に入りの場所がある.」, 「Q8地元のまちに住み続けたい.」であった。『自然体験』および『地域を学ぶ活動』についての観測変数へのパス係数の大きい順は60サンプルと同様であった。『地域愛着』(0.40) から「Q23地域貢献」に向けた因果パスが確認できた。『地域愛着』(0.39) と「Q21家族の地元での就職希望」(0.39) から「Q22自分自身での地元での就職希望」に向けた因果パスが確認できた。「Q22自分自身での地元での就職希望」の決定係数 $R^2=0.30$ であり、地域愛着と家族の地元での就職希望によって

自分自身の地元での就職希望の30%が説明できると解釈でき、地域愛着と家族の地元での就職希望が同程度に影響を及ぼしていることが分かった。

5. 考察

表4に示した『地域愛着』および『コミュニケーション』を構成している因子のスコアから、今回の調査の対象者は自分の地元に対して好印象を持っており、また地域に貢献したい意欲があると考えられた。『コミュニケーション』を構成している因子のスコアは、日本人を対象とした2つの調査よりも高い値を示した。Hofstede Insights²¹⁾によると「集団主義 対 個人主義(0

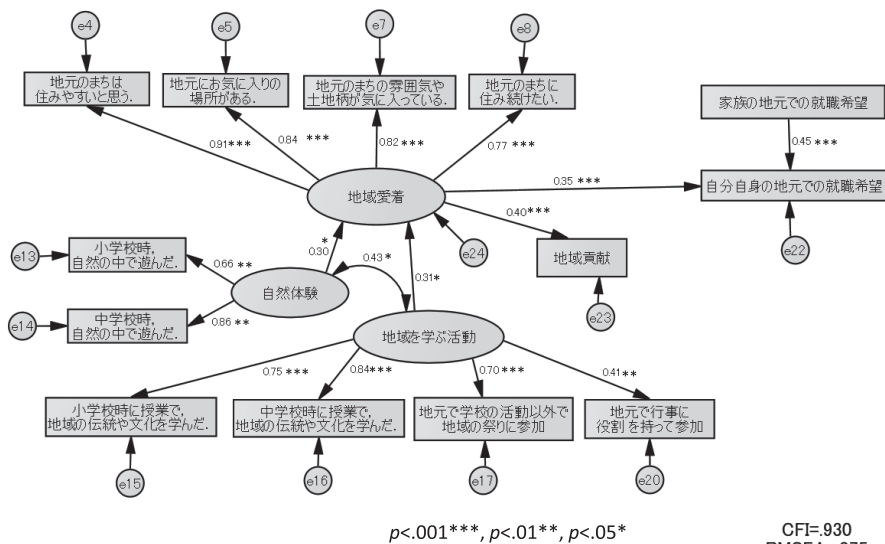


図1-1 地域愛着と自分自身の地元の就職希望の関係性 (n=73)

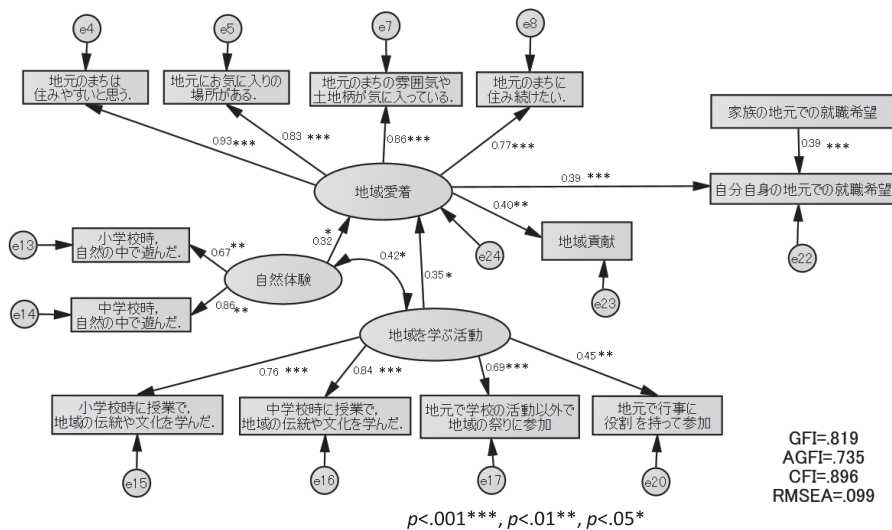


図1-2 地域愛着と自分自身の地元の就職希望の関係性 (n=60)

が最も集団主義的、100が最も個人主義的)」において中国のスコアは43、日本のスコアは62である。今回の結果は、中国の方が日本と比べて集団主義の傾向があることも一因であると考えられる。

共分散構造分析の結果から地域愛着を醸成する要因は、今回の調査では『自然体験』および『地域を学ぶ活動』であった。性別、兄弟の有無、居住年数、『コミュニケーション』は有意ではなかった。居住年数が幾分地域愛着を醸成するという先行研究²²⁾もあるが、今回の調査の対象者は大学生で年齢がほぼ同じ、また居住年数も高校時代まで過ごした年数でほぼ同じであることから差がつかなかったことが考えられる。『コミュニケーション』は有意であると仮説を立てていたが、既述のHofstede Insights²¹⁾から中国人はそもそもコミュニケーションよくとる民族であると考えられ、有意を示さなかったと考えられる。『地域を学ぶ活動』と『自然体験』の共分散が認められたことから、『地域を学ぶ活動』と『自然体験』は相互に影響を与え合い、『地域愛着』を醸成すると考えられた。『地域愛着』は『地域を学ぶ活動』や『自然体験』から高められ、その結果地元への就職希望を高めるという流れが示された。一方で家族の意向が地元就職に結びつくことも示された。また、『地域愛着』は「地域貢献」を高めることも示唆された。

『地域を学ぶ活動』の結果から『地域愛着』を醸成するためには、地域の伝統や文化を学ぶ教育、祭り参加に力を入れる施策が重要であると考えられる。『自然体験』の割合が中学校では小学校に比べて減っていることから、例えば中学校の授業の中でも自然体験ができるような授業も取り入れることが考えられる。このように地域愛着の醸成に力を入れることで、地域社会の絆が深まり地元就職の増加に繋がる可能性があることが示唆された。

ただし今回の結果は、内モンゴルにある大学の日本語を専攻する学部生および大学院生の地域愛着および地元就職志向の分析結果からみた一面に過ぎない。今後は他地域の学生の地域愛着と地元就職志向について検討をする必要がある。

6. 結論

中国人の大学生および大学院生の地元就職志向を探るために、2023年9月に内モンゴルにある大学の中国人の大学生および大学院生を対象として属性、地域愛着、近所の人とのコミュニケーション、地域を学ぶ活

動、自然体験、家族の地元の就職希望、自分自身の地元の就職希望および地域貢献についてアンケート調査を行った。調査項目について因子分析、共分散構造分析を行い、地域愛着と自分自身の地元の就職希望の関係を考察した。

その結果、『地域愛着』は『地域を学ぶ活動』や『自然体験』から高められ、その結果地元への就職希望を高めるという流れが示された。一方で、地元就職は家族の意向もあることが示された。また『地域愛着』は「地域貢献」を高めることも示唆された。『地域愛着』を醸成するには小学生の時期から地域の伝統や文化を学ぶ教育、祭り参加、および自然体験をすることが重要であると考えられた。このように地域愛着の醸成に力を入れることで、地域社会の絆が深まり地元就職の増加に繋がる可能性があることが示唆された。

7. 謝辞

本調査を実施するにあたってご協力いただいた内蒙古大学 准教授 包 賀喜格図先生、九州共立大学 講師 入江雅仁先生に感謝申し上げます。また、Abstractの英文校正をしていただきましたエディテージにも感謝申し上げます。

参考文献

- 1) 岸真清 (2020) : 中国の株式型クラウドファンディングと地方創生—米国の事例を参考にして—。経済学論纂, 60 (5.6), pp. 171-186.
- 2) 胡芸航 (2022) : 触媒としてのデザインによる地域活性化—貴州での事例検証を踏まえて—。京都芸術大学大学院紀要, 3, pp. 223-234.
- 3) 日本経済新聞 (2019) : 「政府、中国と地方創生で連携 ビッグデータを活用」。https://www.nikkei.com/article/DGXMZO49360000T00C19A9PP8000 (2023年12月5日取得)
- 4) 成情情 (2022) : 中国における地方大学生の就職志向の規定要因。広島大学大学院人間社会科学研究科紀要「教育学研究」, 3, pp. 232-241.
- 5) 範 俏慧 (2017) : 中国小都市出身の大卒者の就職における家族の影響—江蘇省S県出身大卒者に対するインタビュー調査に基づいて—。教育社会学研究, 101, pp. 91-110.
- 6) 森 豪大, 簀谷 祐介, 宋 俊煥 (2022) : 高校生のシビックプライドの醸成要因と将来の定住意識に与える影響 - 富山県高岡市に居住する高校生を対象と

- して - . 都市計画論文集, 57 (3), pp.933-940.
- 7) 森 豪大, 藪谷 祐介, 宋 俊煥 (2023) : 農漁村地域における高校生のシビックプライドの醸成要因と将来の定住意識に与える影響. 日本都市計画学会中部支部研究発表会論文集, 34, pp.7-12.
- 8) 海野 遥香, 増本 太郎, 寺部 慎太郎, 柳沼 秀樹, 田中 皓介 (2022) : 若年層に着目した地域愛着・街のシンボルへの意識とUターン行動の関連性. 都市計画論文集, 57 (3), pp.1180-1185.
- 9) 安藤 孝敏 (2022) : 大学生の地域愛着がUターンの意識に及ぼす影響. 横浜国立大学教育学部紀要. III, 社会科学, 5, pp.1-9.
- 10) 科学技術振興機構 : JST/APRC基礎資料集「中国の主要な大学・研究機関」. <https://spc.jst.go.jp/univorg/index.html> (2023年12月6日取得).
- 11) 鈴木春奈・藤井聡 (2008) : 「風土」への接触が「地域感情」に及ぼす影響に関する研究. 景観・デザイン研究講演集, 2, pp. 6-9.
- 12) 桜井良, 小堀洋美, 中村雅子, 菊池貴大 (2016) : 住民のコミュニティへの関与度や愛着が緑化意欲に与える影響. 環境科学会誌, 29 (3), pp. 149-158.
- 13) 黒田琴絵, 小川みふゆ, 吉田丈人 (2021) : 人と自然および人と地域社会の心理的関係性とそれに影響する属性および習慣的要因 : 自然再生が進む地域の中学生を対象とした分析. 日本生態学会誌, 71, pp. 105-122.
- 14) 田中敏 (2006) : 実践心理データ解析 改訂版. 新曜社, p. 242.
- 15) 小田利勝 (2007) : ウルトラ・ビギナーのためのSPSSによる統計解析入門. プレアデス出版, p. 198.
- 16) 小田利勝 (2007) ,前掲, p. 212.
- 17) 藪谷祐介・阿久井康平 (2021) 高校生の通学時における地域接触が地域愛着形成に与える影響 富山県小矢部市内の高校に通学する高校生を対象として. 都市計画論文集, 56 (3), pp. 772-779.
- 18) 引地 博之, 青木 俊明, 大淵 憲一 (2009) : 地域に対する愛着の形成機構—物理的環境と社会的環境の影響—. 土木学会論文集D, 65 (2), pp. 101-110.
- 19) 鈴木 春菜, 藤井 聡 (2008) : 地域愛着が地域への協力行動に及ぼす影響に関する研究. 土木計画学研究・論文集, 25 (2), pp. 357-362.
- 20) スタッズギルド株式会社 統計解析・データマイニング推進部 (2021) : IBM SPSS Amos【基礎編A】構造方程式モデリング入門. スタッズギルド株式会社, pp. 1-13-1-16.
- 21) Hofstede Insights (2023):[COUNTRY COMPARISON TOOL]. <https://www.hofstede-insights.com/country-comparison-tool> (2023年12月5日取得)
- 22) 引地 博之・青木 俊明 (2005) : 地域に対する愛着形成の心理過程の検討. 景観・デザイン研究講演集, 1, pp. 232-235.

Received date 2023年12月19日

Accepted date 2023年12月19日